

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：基盤研究 (A)
 研究期間：2006 ～ 2009
 課題番号：18209018
 研究課題名 (和文) 健康・医療情報の適切な創出・伝達・利用を促進する社会的基盤整備に関する研究
 研究課題名 (英文) Research on the development of infrastructure for creation, communication and utilization of healthcare information
 研究代表者
 中山 健夫 (NAKAYAMA TAKEO)
 京都大学・医学研究科・教授
 研究者番号：70217933

研究成果の概要 (和文)：ヘルス・リテラシーの概念形成を進め、義務教育からのリテラシー学習に向けて全教科教科書 427 冊の内容分析を実施。中学生・保護者向けのパイロット・プログラム (17 人参加) を実施。インターネット上でのヘルス・リテラシー向上プログラム (パイロット版) を作成。eヘルス倫理コード改定、英語・中国語版を開発し、商業的・公的サイトの健康情報提供情報を評価。

研究成果の概要 (英文)：The concept of “health literacy” has been reviewed and refined. Content analyses of all textbooks used at elementary or junior-high schools have been conducted to develop the health literacy program for compulsory education. A pilot program was provided for students at junior-high schools and their parents (n=17). A pilot web-based health literacy program has been developed and examined for its usability. The e-health ethics code has been revised and translated into English and Chinese. Health information on the web provided by the local authorizes and healthcare facilities.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	6,200,000	1,860,000	8,060,000
2007年度	8,800,000	2,640,000	11,440,000
2008年度	8,800,000	2,640,000	11,440,000
2009年度	5,800,000	1,740,000	7,540,000
年度			
総計	29,600,000	8,880,000	38,480,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：境界医学・医療社会学

キーワード：医療情報学、医療の質、地域医療学、健康情報、根拠に基づく医療 (EBM)、情報リテラシー、ヘルス・コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

現代人の最大関心事として健康・医療や生活安全に関わる諸問題があるが、日々、様々

の情報源からの情報が氾濫し、どれが信用できる情報なのか判断することの困難さは増大している。医療・医学や健康科学の急速な

進展は、患者や生活者の立場からはその内実が容易には理解し難く、十分な信頼と安心を以ってそれらの恩恵を受けるには至っていない。医療者や研究者などの専門家は、固有領域に分化された科学的知識は有するが、患者・生活者の視点に立って問題解決を支援する助言や情報提供を行う事は大きな関心を払ってこなかった。このような状況で、個人が疾病罹患時の医療資源の利用、またはセルフケアをはじめとする保健行動を適切に行なうために、関連情報を適切に活用し、行動へと繋げる能力、すなわち医療・健康に関する情報リテラシー、すなわちヘルス・リテラシー向上の重要性が注目されている。同時に専門家にとっても、患者・生活者に適切に理解される形での情報伝達が不十分であると、研究倫理問題できびしく議論されたように、研究者であれ医療者であれ、その存在自体が社会から受け入れられなくなる可能性が高まっている。患者・生活者の情報リテラシー向上支援を含め、医学・健康に関する専門的情報をどのような形で社会に伝達すべきか、健康・医療の専門家が社会に対して果すべきアカウンタビリティの必要性が高まっている。

「情報とは行動における不確実性を減ずるもの（シャノン）」とされるが、適切な情報が取り入れられれば、自らの価値観で定め目標に到達する可能性を増す意思決定が可能となる。反対に情報が活用できなければ、または誤用したならば個人の目標は達成されない。ヘルス・リテラシーとは、健康に関する情報にアクセスし、それを理解し、活用できる能力とされ、国際的に健康の重要な決定要因と考えられている。当初、英語圏で生活する英語を母国語としないマイノリティの問題として注目されたが、現在は英語ネイティブにもリテラシーが低い人々が存在することが指摘されている。ヘルス・リテラシーは普遍的で魅力的な概念と思われるが、わが国でそれをどのように位置づけ、問題対応の切り口としていくかは検討がきわめて不足している。

今日、マスメディアとインターネットを介して一般生活者に伝達される健康・医療情報は社会的に大きな影響力を持っている。それらの情報を読み取り、適切な行動に繋げる知識・技能の体系化は急務であるが、氾濫する情報に比してその取り組みは不十分である。1990年代半ば以降、医療情報の評価に際して疫学を基盤とする「根拠に基づく医療（Evidence-based Medicine：EBM）」が急速に普及し、臨床医療を越えた領域にも普遍化されつつある。マスメディア・インターネ

ット上の健康・医療情報の質評価に際して、海外では様々な形でEBMの考え方が活用されているが、国内での実証的な検討は発展途上の段階にある。

欧米におけるヘルス・リテラシーは「読み書き」能力が基本とされるが、識字率の高いわが国では（高齢者を除き）、そのような基本的能力の評価で解決するものではない。適切なセルフケア行動や治療・診断的介入の損得（益と害のトレードオフ）、コスト意識や医療の不確実性（確率論）など、より深い情報の理解力も日本におけるヘルス・リテラシーの概念形成には取り込む必要がある。

2. 研究の目的

本研究で、日本における健康・医療領域の情報リテラシー（ヘルス・リテラシー）の概念形成と評価法の開発、患者・生活者の情報探索・理解能力・意思決定・行動への影響に関する実態調査、インターネット上の健康・医療情報の伝達形式・質の評価と改善策の提案・普及、患者・生活者（学童・学生含む）のヘルス・リテラシー向上支援プログラムの開発を通して、健康・医療情報の適切な創出・伝達・利用を促進するための社会的基盤整備に取り組むものである。

3. 研究の方法

文献研究、疫学研究、インタビュー調査を課題に応じて利用。

4. 研究成果

ヘルス・リテラシーの概念形成に関し、文献レビューと新たな論考により雑誌特集号を刊行（からだの科学 2006年9月号）。NPOインターネット医療協会によるeヘルス倫理コードv.2（コンテンツ、コミュニケーション、ケア、サービス、コマース、プライバシー-6領域）英語・中国語版を開発

（http://www.jima.or.jp/ehealth_code/）。前立腺がん検診に関するWeb情報を評価。「前立腺がん+検診」の検索結果で上位50位のサイト運営主体者の最多は市区町村自治体等の公的機関であり、エビデンスの確立程度に照らして前立腺がん検診のbenefitに強調する情報提供が多いことを示した。豪・ニューキャッスル大学を訪問し、新聞記事における健康・医療情報の評価プロジェクト・”Media☆Doctor”を基にマスメディア情報の質評価について協議。義務教育からのリテラ

シー学習に向けて、健康・医療情報の提供状況について全教科教科書 427 冊の内容分析を実施。調査者 2 名が独自に採録したものを突合し合意後に分析対象として計 21,836 件を抽出、喫煙・禁煙、性教育と葬送儀礼の記述について学会発表。義務教育における健康情報リテラシーの教育プログラムの開発に向けて京都大学ジュニアキャンパス（平成 19 年 9 月 29 日）においてパイロット・プログラムを提供（中学生 11 人、保護者 6 人参加）。新聞広告を素材として小集団討議後に、疫学的概念の基礎（分母・分子、バイアス、交絡、比較の意義など）を解説するプログラムに対し積極的な興味と好奇心が感想からうかがわれた。医療制度改革の行動目標の一つ「医療情報の提供による適切な医療の選択の支援」に照らして都道府県による情報提供の視点から評価（平成 20 年 4 月 1 日から 5 日）、医療機能情報提供制度（平成 19 年度～）に関し都道府県の情報提供の内容・アクセス性の差が大きいことを報告。ユーザー数の多い一般向け健康・医療関係サイト

(<http://www.qlife.co.jp/>) において、イラストレーションとストーリーを組み合わせたヘルス・リテラシー向上プログラムを開発し、ユーザビリティ調査を実施。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件：全て査読有）

英文原著

- ① Ueta E, Mifune T, Nakayama T.
Diabetes prevention information in Japanese magazines with the largest print runs: Content analysis using clinical guidelines as standard. Japanese Journal of Public Health. 印刷中
- ② Akamatsu R, Naito M, Nakayama T.
Characteristics of reporting diabetes mellitus research results in Japanese

newspapers. BioScience Trends. 2009; 3(2):44-47

- ③ Takahashi Y, Uchida C, Miyaki M, Sakai M, Shimbo T, Nakayama T. Potential benefits and harms of a peer support social network service on the Internet for people with depressive tendencies: qualitative content analysis and social network analysis. Journal of Medical Internet Research. 2009; 11:e29
- ④ Takahashi Y, Nakayama T, Miyaki K. Analysis of News of the Japanese Asbestos Panic: A supposedly resolved issue that turned out to be a time bomb. Journal of Public Health (Oxford). 2007;29(1):62-9.
- ⑤ Naito M, Nakayama T, Hamajima N. Health literacy education for children: Acceptability of a school-based program in oral health. Journal of Oral Science. 2007;49(1):53-9.

和文（なし）

〔学会発表〕（計 1 件）

- ① Takahashi Y, Nakayama T.
“Use of the Internet for Health-related Information in Japan: a Cross-sectional Population-based Survey” について発表
Medicine 2.0 2009: the World Congress on Social Networking and Web 2.0 Applications in Medicine and Health. (2009 年 9 月 18 日 MaRS Centre / トロント, カナダ)

〔図書〕(計3件)

- ① 中山健夫, 健康・医療の情報を読み解く:健康情報学への招待. 東京:丸善出版, 2008、171 ページ
- ② 米国立がん研究所(編集)、中山健夫(監修)、高橋吾郎、杉森裕樹、別府文隆(監訳) ヘルスキューション実践ガイド. 東京:日本評論社、2008、229 ページ
- ③ 杉森裕樹・中山健夫(編集) IT時代のヘルスリテラシー. からだの科学 2006.9月号、80 ページ

〔その他〕

マスメディアで紹介 1.産経新聞「白インゲン豆ダイエット:健康番組の危うさ」2006年5月30日 2.朝日新聞「ずさんな実験データ:だまされぬ6つのヒント」2007年2月13日 3.産経新聞「それってホント?健康情報」連載20回2008年5~8月 4.朝日新聞「賢い患者になるために:ネット検索3つのポイント・診療ガイドラインを知るのも重要」2008年12月16日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中山 健夫 (NAKAYAMA TAKEO)
京都大学大学院・医学研究科・教授
研究者番号: 70217933

(2) 研究分担者

杉森裕樹 (SUGIMORI HIROKI)
大東文化大学・スポーツ健康科学部・教授
研究者番号: 20276985
(H19→H20:連携研究者)

赤松利恵 (AKAMATSU RIE)

お茶ノ水女子大学・人間文化創成科学研究科・准教授
研究者番号: 50376985
(H19→H20:連携研究者)

吉池信男 (YOSHIIKE NOBUO)
青森県立保健大学・健康科学部・教授
研究者番号: 80240232
(H19→H20:連携研究者)

内藤真理子 (NAITO MARIKO)
名古屋大学・医学研究科・講師
研究者番号: 10378010
(H19→H20:連携研究者)